

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	八尾市立障害者総合福祉センター（放課後等デイサービス）		
○保護者評価実施期間	2025年2月10日 ～ 2025年3月10日		
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	16 (回答者数)	11
○従業者評価実施期間	2025年2月10日 ～ 2025年3月10日		
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	5 (回答者数)	5
○事業者向け自己評価表作成日	2025年3月31日		

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	重心児、医療的ケア児の受け入れ先となっている。未だ受け入れ先の少ない重心児、医療的ケア児を受け入れ、保育士だけでなく児の生活や成長に必要な看護師、機能訓練士も常駐し、安心・安全に過ごせる環境を提供している。児一人ひとりを十分に理解し、特性や年齢に沿った発達課題を見極め、手厚い支援を福祉、医療の両面から行うことができている。	学童期は12年と長いため、幅広い年齢に沿った関わりが大切である。その中で児一人ひとりの成長課題においては保育の五領域に基づいた支援計画を立案している。保育士、看護師、機能訓練士が支援計画を共有し、個々の課題や支援内容を振り返り、確認しながらよりよい支援を考え、なおかつ集団で活動するうえで楽しめる環境を提供している。	多職種で児の現状を把握し、共有している。それぞれの専門的な見解を基に、話し合い、児が成長するうえで大切なことや楽しく過ごすための課題を明確にしていく。また、職員一人ひとりの質の向上を目指し、ワークショップの開催や外部研修への参加を積極的に行っていく。
2	内容が固定化しないよう工夫して活動を提供している。下校後の限りある短時間の中で、活動プログラムが固定化されないようにし、成長に欠かせない経験や社会性を育めるよう工夫している。その中で五感にアプローチすることを大切に、発育、発達に必要な支援を踏まえて、活動への参加のしやすさやどうすれば楽しめるのかなどを話し合い、活動内容を組み立てている。	放課後等デイのフロアだけでなく、スポーツホールや戸外での運動活動や、ギャラクシールーム（スヌーズレンルーム）やデジタルリハビリなども活用している。活動内容はテーマを決め、なおかつ季節行事も盛り込みながら、遊園地や水族館などのテーマパーク、夏祭りや流しそうめんなどなかなか経験できないことに触れるようなプログラムを実施。児の反応を受け止め共感し、意思の表出を心がけている。	短時間で活動内容に起床転結の展開をしないといけないうえ、重要なポイントを職員で共有し、児が理解しやすいような環境を整えていかなければならない。安楽な姿勢で参加できているか？サポートする補助具はなにが必要か？などを話し合い、環境（もの）を充実させていく。テーマに沿い、どうすれば児が楽しく参加できるのかをモットーに改良、改善に努める。
3	保護者とのコミュニケーションを大切にしている。日々の活動内容や児の様子について、保護者と情報交換することで児一人ひとりへの理解を深め、児の課題や家族のニーズ、困りごとを明確にし、支援につなげている。家族と発達状況を共有でき、課題やニーズに向けて共通認識を持ち、支援が変化の中で柔軟に対応している。	日常の様子は主に連絡帳でのやり取りが中心で細やかにかつ丁寧に情景が伝わりやすいような内容を記入するよう努めている。活動の様子をInstagramへ投稿し、文章だけでなく映像でも理解が得られるように工夫している。また、送迎時には気になることや報告、相談などを行ない、直接対話をし、信頼関係を築けるようコミュニケーションを大切にしている。	12年という学童期の中で児の発達における家族のニーズや困りごとに変化してくる。不安なことや困りごとに寄り添い、傾聴、助言をし、よりよい支援方法を家族と一緒に模索していく。また、Instagramの投稿についても様々な角度から写真を撮り、様子を伝えることで児や家族が安心して利用できるよう努めていく。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	活動スペースにもう少しゆとりがあるとよい。生活空間も子どもにわかりやすいよう構造化されていない。	放課後等デイサービスが立ち上がってから、子どもたちがどこで過ごすことがベストなのか、試行錯誤を行ってきたが、検討した結果、デイサービスの拠点となる3階フロアで過ごすことが最適だと結果で現在に至る。重心児や医療的ケア児を迎え、看護師や機能訓練士がメインで常駐している3階が多職種で支援できると考えた。	現フロアで過ごすことが決定してから、数年経つが児の成長に伴いフロアが手狭になってきている。毎日3名～5名の利用児があり、バギーの台数だけでも置き場に配慮が必要である。その日の利用児により、活動に関しては思い切り楽しめるよう、別室を使用するなど工夫をしているが余暇時間はフロアで過ごすため、それぞれの居場所を確立し、安全に過ごすことを優先させる。
2	保護者会の活動支援や開催するなど、保護者同士の交流の機会や家族向けの研修会、情報提供の場が設けられていない。	近年の傾向では、両親共働き世帯が増え、保護者会への参加者も年々減少傾向にあった。さらに新型コロナ流行にも直面し、開催を控えた経緯がある。実施したい気持ちはあるが、一同が参加する会を開くにあたり参加希望がどれくらいあるのか、また日々忙しい保護者が多い中、日時設定など課題が多い。しかし、個々での困りごとや課題に対しては、早期対応を心がけ支援できている。	保護者へのアンケート結果にも表れていた、避難時の対応や保護者会への結果を踏まえて、今年度は防災にまつわるイベントと保護者会を合わせて開催することを企画している。児発利用者家族、放デイ利用者家族が集まり、談話する機会を設ける。
3	地域の子どもと交流する機会を設けられていない。	地域交流は、長年の課題であり、交流する場を設けたいという思いはある。しかし、下校後の利用が短時間であることなどを踏まえると、平日は時間を取ることが難しいのが現状である。近くの公園へ行き、その場にいる子どもたちとの触れ合いは多少ある。地域交流と社会体験の名目で年1回買い物へ行くイベントを企画し、実施している。	長期休みを利用し、地域の人々と関われるよう、地域参加型の社会体験を積むようなイベント（祭りやバザー、外部から招いて音楽鑑賞会など）を企画する。また、施設内での世代交流なども含め、様々な人と触れ合うことで、学ぶこともあるため、施設内、外で交流できる場を設定する。